



TITLE:

POLITICAL ECONOMY OF CORPORATE
PACKAGED FOOD : A STUDY OF EXCHANGE
AND CONSUMPTION IN METRO MANILA'S
SLUMS(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

HERIBERTO, RUIZ TAFOYA

CITATION:

HERIBERTO, RUIZ TAFOYA. POLITICAL ECONOMY OF CORPORATE PACKAGED FOOD : A
STUDY OF EXCHANGE AND CONSUMPTION IN METRO MANILA'S SLUMS. 京都大学, 2019,
博士(経済学)

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21520>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により本文は2019-09-
12に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（経済学）	氏名	HERIBERTO RUIZ TAFOYA
論文題目	POLITICAL ECONOMY OF CORPORATE PACKAGED FOOD : A STUDY OF EXCHANGE AND CONSUMPTION IN METRO MANILA'S SLUMS (包装食品の政治経済学：メトロ・マニラにおける交換と消費の研究)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、世界中で今なお多くの人々が暮らすスラム地域において、企業の加工食品（corporate packaged food: CPF）が果たす役割、スラム地域住民による加工食品の交換と消費が有する経済的・社会的・文化的な含意を明らかにすることを目的とし、フィリピン・マニラの3つのスラム地域で実施した現地フィールド調査を元に、以下の3つの論点を立てて理論的・実証的に詳細な論証を行ったものである。第1に、歴史的・構造的に創出されたスラム地域住民の後進性と食料生産手段からの疎外（生産能力の欠如と他者への依存）ゆえに、彼らの基本的ニーズを満たす上で食品加工企業の役割が増大し、食料消費過程の食品加工企業への更なる「包摂」（appropriate）をもたらすのか否か。第2に、スラム地域住民の食料生産からの疎外ゆえに、彼らは後進的な生活状況と加工食品の消費から抜け出せないままとなるのか否か。そして第3に、食料の交換と消費を慎重に実践することによって、スラム地域住民がこうした疎外状況から自らを「解放」（emancipation）する余地を見いだすことができるのか否か、である。これらの課題に接近するため、本論文は以下の8章で構成される。</p> <p>まず第1章では、①スラム地域の食を捉えるための政治経済学的研究、②同じくスラム地域の食を捉えるための関連社会科学諸領域の研究、③加工食品と企業の影響力に関する研究、それぞれに関する文献レビューを通じて、本論文の立ち位置と学術的な貢献可能性を確認するとともに、調査地域及び調査方法に関する説明が加えられている。</p> <p>第2章では本論文で用いる諸概念及び分析枠組みが提示される。具体的には、①CPFを政治経済学的な概念である「商品」（commodity）として捉える視点、②CPF商品の物理的・経済的な交換・消費という「市場領域」（market sphere）だけでなく、その交換・消費に付随する精神的・社会的な「意味領域」（meanings sphere）を捉える視点、③スラム地域及びスラム世帯をやはり政治経済学的な概念として歴史的・構造的・動態的に捉える視点、である。</p> <p>第3章では、フィリピン・マニラにおいて CPF 等の企業ブランド食品市場が形成・展開・発展してきた 1870 年代から今日に至る歴史過程が整理され、現在のスラム地域で観察される CPF 交換・消費の実践が産業資本（食品加工企業）による浸透・影響・支配の長期的プロセスの結果であることが明らかにされる。</p> <p>第4章では、スラム地域でも広く見られる典型的な零細小売店舗（Sari-Sari store）を食品加工企業とスラム消費者とを媒介する主要な結節点と位置づけ、調査地域の8事例を対象に実施した詳細な聞き取り調査を元に、CPF がスラム地域に浸透し影響を及ぼす経路と現状（市場領域）、ならびに Sari-Sari stores の店主でもあるスラム地域住民にとっての CPF の意味領域の分析が試みられる。そして、CPF に対する物神性（fetishism）がその日常的な小売活動を通じて創出・拡張してきた様子が明らかにされる。</p> <p>第5章と第6章では、スラム世帯における CPF 消費の実態が、調査地域の 61 世</p>			

帯を対象に実施した詳細な聞き取り調査を元に、それぞれ市場領域と意味領域に焦点を当てて分析されている。具体的には、まず第5章で、スラム世帯が置かれている構造的諸条件のみならず、各世帯の多様な状況的諸条件が CPF 消費の程度や態様を規定していることが明らかにされる。続く第6章では、スラム世帯の CPF 消費において、①生理的意味（味覚等の感覚、充足感、栄養など）、②合理的意味（時間・燃料・空間・支出等の節約や企業等による販促への呼応など）、③社会文化的意味（祝事等の社会行事、友人・知人との社交やその他の社会文化的活動の一環）、④情動的意味（家族・友人の好みや懐古等の共有）、⑤職業的意味（家事や食堂・小売等の仕事上の必要）の5つに分類されるような「意味」が付与されていること、それらがスラム世帯内の日常的消費実践を通じて、あるいは世代間関係を介した共有や変容を伴いながら、構築されてきたことが明らかにされる。

第7章では、スラムにおける食料消費過程の「資本による包摂」(appropriation)が議論される。そこでは、「資本による包摂」概念の妥当性（適用可能性）が類似概念との対比で理論的・概念的に検討されるとともに、包摂のプロセスが具体的には、食品加工企業によるスラム地域及びスラム世帯の諸条件に適応した市場領域の攻略（一部ブランド品の小袋廉価販売とスラム地域内食品供給網の物量的・空間的な席卷）を通じて、さらに BoP マーケティング・ツールの活用を通じた意味領域の攻略（社会文化的な支配、CPF を正当化・常識化する「コンセンサス」の創出）を通じて展開していることが明らかにされる。

そして第8章では、以上の考察を総括しながら、冒頭で触れた3つの論点に回答が与えられる。すなわち、第1に、スラム地域における CPF への需要はスラム世帯が置かれている構造的及び状況的な諸条件に規定され、また、そうした諸条件ゆえにスラム地域住民が CPF に付与する「意味」によって補強されていること、さらにそうした諸条件や意味づけに適応した供給側（食品加工企業）のプッシュ戦略が CPF の浸透・拡大を促してきたこと。第2に、スラム住民が彼らの後進性と疎外状況から抜け出す可能性を理論的に論じることとはできても、実際には日常的な CPF の交換・消費実践を通じて彼らの後進性と疎外状況が再生産されていること。それゆえ第3に、食料の交換・消費実践の見直しを通じて彼らが自らを解放する余地は限られており、外部からの介入なしに解放可能性を論じることが難しいこと、が結論づけられる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、フィリピン・マニラの3つのスラム地域で実施した長期かつ数次に渡る現地フィールド調査を元に、また、批判的政治経済学や関連社会科学諸領域の概念や分析枠組みを積極的・批判的に取り入れながら、社会的・経済的に脆弱な立場に置かれたスラム地域住民の後進性と疎外状況が、ブランド企業の加工食品(CPF)の日常的な交換と消費の実践を通じて如何に再生産されているのかを実証的かつ理論的に明らかにした労作である。その意義は以下の諸点に整理できる。

第1に、従来の批判的政治経済学による食料研究が生産過程を重視してきたのに対して、本論文では、スラム地域の構造的条件やスラム世帯の食料生産手段からの疎外状況を鑑み、食料(CPF)の交換と消費の過程に着目し、批判的政治経済学の射程を広げた点にある。食料の交換・消費過程への視座、とりわけ生活主体でもあるSari-Sari storesとスラム世帯の日常的な交換・消費実践への視座は同時に、物理的・経済的な関係性＝市場領域に加えて、精神的・社会文化的な関係性＝意味領域を分析対象に加えることを要求し、そのことによって批判的政治経済学の分析に深みを与えている。

第2に、こうした分析を可能ならしめた、3つのスラム地域で実施した現地フィールド調査の重みである。それによって得られたSari-Sari stores等のスラム地域内食料供給網の実態とスラム世帯の消費行動・生活史に関する質的一次資料は極めて貴重であり、その分析によって説得的な議論を展開することに成功している点である。本論文は批判的政治経済学や関連社会科学で用いられてきた様々な概念や分析枠組みを積極的に参照するなど理論や方法論に関する学術的貢献も顕著であり、フィールド調査の成果を理論的に整理・分析しながら諸概念の豊富化(や通説的理解への挑戦)を試みている点も評価できる。

第3に、スラムで暮らす人々を抽象的な経済単位に矮小化したり調査研究の単なる客体にとどめたりすることなく、彼らを多様な生活史と生活実態を有する社会文化的な単位、あるいは疎外状況からの解放に向けて成長しうる(しかし圧倒的な制約下にある)主体として捉える視点を堅持している点である。

しかしながら、本論文にはいくつかの課題も残されている。第1に、調査対象の限定性についてである。例えば、スラム世帯の調査対象を女性に限定しているが、食料消費過程と生活実態に根ざした著者なりの判断によるものだったとはいえ、スラム地域内の経済主体、スラム世帯内の消費生活主体としての男性も分析対象に据えることにより、本論文の議論を補強(トライアングレーション)できたのではないか。また、政策主体・規制主体である政府が果たしてきた・果たしうる役割が分析対象から捨象されている点については著者も本論文の限界として認めているが、それ以外にも学校その他の制度主体がCPFの浸透とスラム食料消費過程の資本への包摂(あるいは包摂への抵抗)に果たしている・果たしうる役割にも注意を払う必要があったのではないか。

第2に、本論文の研究対象がスラム地域の食料消費過程であり、その限りで(例えば食品ブランド企業によるBoPビジネスとしての)CPFの製品開発やマーケティング戦略が論じられているものの、さらに、その背景として一般市場での食品企

業の事業戦略や関連産業の構造再編がいかに展開し、その結果、食品の製造・流通・販売・消費の形態にどのような変化が生じてきたのか、そして、そのことがスラム地域内へのCPF浸透やスラム世帯のCPF消費拡大とどのように関わっているのかを分析する作業、換言すれば、本論文で明らかにされたスラムCPF消費過程の変化それ自体をより大きな歴史と構造の中で相対化する作業が必要だったのではないか。

第3に、CPFの浸透を通じた食料消費過程の「資本による包摂」が拡大・深化する中で、スラム地域住民の主体形成と解放可能性を肯定的に展望することができないというのが著者の見立てであるが、疎外からの「解放」とまでいかなくとも、James Scottが描いたような日常における多種多様な「抵抗」の実態やその可能性に関する言及があっても良かったのではないか。また、スラム地域内の「コミュニティ」が社会関係資本や連帯経済として語られうるような内実を後退・喪失させていることが、スラム地域住民の内発的な主体形成と解放可能性に対する大きな制約要因となっているとのことだが、そのことへの言及が本文でなされる必要があったのではないか。

とはいえ、以上に挙げた諸課題は、将来に向けた著者の研究の発展方向を示唆したものであって、本論文が現時点において達成した学術的価値をいささかも損なうものではない。よって、本論文は、博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、2019年2月5日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。